

# F夫人

椎名 利(化工会)

二〇一七年九月一八日一六時 横浜港出港

低く尾を引くドラの音が出港の合図を告げると、プロムナードデッキの船客から一斉に白、青、赤などのテープが投げられ、大棧橋の送迎デッキと繋がれた。テープは風になびき持っているのに結構力を要した。休日のためか大型船の出港を見ようとする、観客で埠頭のデッキはぎっしりと埋まっていた。手を振ると手が振られ、誰とはなく船客と見送りの観客とのコミュニケーションが成立する。二隻のタグボートに曳かれた船はゆっくりと岸壁を離れていく。

行く手には、横浜の風物を彩るベープブリッジが優雅な形を表している。左舷側を見ると、赤レンガ倉庫、帆かけ船をイメージしたインターコンチネンタル・ホテル、ランドマークに重なるかに、遠くには富士山が望めた。見送りの客に別れを告げるかに汽笛が三笛鳴らされた。

やがて船はベープブリッジを通過すると、右舷に本牧コンテナ・センターのクレーンが乱立している。四つ足の架台に設置された二十メートルはあると思われるクレーンは、まるでキリンが四つ足を踏んばり、首を立てているかに並んでいた。赤灯台を過ぎると並走していたタグボートが船とぴったりと接するとパイロットが乗り移り、飛鳥Ⅱは神戸を目指して進み始めた。九月一八日は暮れようとしていた。

夕食は二回に分かれていて、私たちは一回目一七時半だった。クルーズにはドレスコードがある。これがどんな服装をしようかと何とも楽しい。今日はカジュアルなのを確認し、五階のフォーシーズン・ダイニングに向かった。ボーイの案内に従って窓際の席に座る。東京湾を出たのだろうか、しかし、船の揺れはほとんど感じられない。

今夜はフレンチ料理らしく、メニューは『砂肝と舞茸のフリット』で始まり、『骨付き仔牛のロティ』のメインデッシュとなっていた。よく訓練されたボーイさんが無駄なく動いてきぱきと注文を受けているが、半数は東南アジア人だった。私も赤ワインのボトルを注文した。

ダイニングのテーブルは、二人を基本にしているが、隣とも容易に会話できる距離に配置されている。やがて隣の席に六〇代前半かと思われる夫人が軽く会釈し

て一人で席に着いた。クルーズは、新婚旅行と思われるカップル以外は年寄りばかりだが、六〇代は若い方だった。長い休暇が必要だから若者は乗れないのは無理もない。

夫人は、ベージュにベイズリーをあしらったブラウス、コットンのベージュのパンツにブルーのカーデガンを羽織っていた。髪は前でそろえていたのでおかつぱみみたいだった。染めたのだから髪は黒かった。

真鯛のカルパッチョなかなかいい。クルーズは海外を含めて七回目になるが国内では飛鳥Ⅱがお気に入りだ。食事がうまい。このクルーズのボーイさんはフィリピンのクルーが担当しているそうだが、よく訓練されているらしく、細かいことにも気配りがあるサービスだった。

クルーズの良いところは見知らぬ人と、気楽に会話できることだ。家内が、一人で食事している夫人に気遣い、

「私たちは横浜からですが、どちらからお見えですか」と、声をかけると、あたかもそれを予期していたかに、夫人は話し出した。

「生まれ住んでいたのは盛岡なのですが、今は保土ヶ谷に住んでいます。年寄りは、一人では大変だからと云うので、甥が就職し横浜に住んだのを機会に、彼のところに一緒にいます」と、朗らかなしゃべりなれた口調で話し出した。あまりプライベートなことを聞くのはと思っていたが、

「私の妹夫婦は、二人とも早く亡くなったため私が子供を引き取りました。甥は私の息子ですよ。小さい時からよくなついてまして、寂しい思いをしたのでしょうが、医者になりました。まだ卵ですが」と、誇らしげに語るとビールを一口飲み唇をペロッと舐めた。

「お甥さんは優秀なのですね」と相槌を打つと、「大学病院に残っているのですよ」と、残りのビールを飲んでしまうと、冷酒を注文していた。

「日本酒がお好きなのですか」と、私が問いかけると、

「ほんとは、このお料理にはワインなのでしょうが日本酒が好きです。恰好付ける歳でもありませんから…」と、朗らかな答が返ってきた。少したれ目が笑うと子供のようにかわいらしかった。

メインデッシュの骨付き仔牛、デザートはジャスミンの香りのアイスだった。GPTは伊豆大島付近を航海中と示していた。

クルーズの催し物は『アスカ・デイリー』として知らされている。毎日配られ、その

日の催し物などが記されている。

今夜はメインホール、ギャラクシ・ラウンジで行われているバンド・ショーを見た。ポーランドからやって来たバンドがポピュラーソングを奏でた。

九月一九日一四時 神戸着 二三時出航

神戸からの乗客を乗せ、二三時に出港した飛鳥Ⅱは、二〇日の朝食時には瀬戸大橋を通過していた。船内のインフォメーションによると、一時二〇分ごろ因島大橋を通過するとのことで、左舷のプロムナード・デッキで瀬戸内海の風景を眺めていた。大小の島々は無人島が多いようだったが、日本はつくづく温暖だと思った。海外では山や島は、岩石が露出しているところが多いが日本は緑が多い。やがて因島大橋がスリムな姿を現した。

しまなみハイウエーの一部を構成するのだが、全長一二七〇メートル、高さ五〇メートル、飛鳥Ⅱの高さは四五メートルで楽に通過できるのだそうだ。橋は二つの主塔によって支えられていた。

夕食後カジノに行った。前回と同じクルーだったので従業員とも顔見知りだった。

ブラックジャックをする。このゲームは、親と二一点にどちらが近いかで勝負が決まる。

始めに二枚のカードが配られ開始となる。ルーレットとは違い運に支配される要素がルーレットより少ない。結構熱中し二時間ほどゲームをした。このカジノでは、たとえ勝ってもチップを現金に換えることは出来ないが、このような非日常的な遊びが行えるのが魅力だ。

深夜、関門海峡を通過した。

九月二一日八時 ひびき港入港(北九州市)

ひびきは、最近世界遺産に登録された『宗像大社』があるが、沖ノ島の『神津宮』、筑前大島の『中津宮』、宗像市の『辺津宮』の総称で、特に『沖ノ島』は『海の正倉院』として脚光を浴びている。

私たちは午後シャトルバスで宗像大社に向かった。伊勢神宮、出雲大社と並び称せられている官幣大社だが意外に質素だった。宗像三女神を祭るこの大社は

道、海路などあらゆる交通の守り神だという。交通安全を願う祈祷が多とのことだった。

夕刻戻り、夕食にダイニングでボーイに案内されていくと、窓際の一人の婦人が微笑みながら手を振っている。初日にご一緒した例の婦人だった。親しげな表情を見せる夫人の好意に従い、私たちは隣の席に座った。

今日は、イタリアンのようで生ハムのサラダで始まった。彼女は今日も冷酒をボトルで飲んでいる。

私たちは、パンフレットに書かれていた伝説、『宗像神社は、天照大神が大陸との要所である玄界灘を守るために、三人の女神を降臨させた』との記事を家内が、

「九州は、どこでも神が降臨した伝説でいっぱいね。古事記や日本書紀にある神話はどこで実際の歴史とつながっているの……」と、生ハムのサラダを食べながら問いかけるので、

「歴史は施政者、勝ち組のものさ。日本書紀を作ったのは多分藤原の……」と言いきり、例の婦人が「藤原不比等ですよ」と、こともなげにいうので改めてこの夫人を見ると、二合ほどの冷酒はもう半分になっていた。

「歴史に詳しいのですね」と云うと、「最近、面白い古代史を読んだので……」と応え、一冊の本の名前を挙げた。

私は、自分よりかなり若い年齢とはいえ、この夫人の記憶力と知識欲に驚いたが、(カルチャーセンターの講義からかな)などと想像したが、職業などプライベートなことを詮索するのは躊躇われた。

そのため、私たちは以後この夫人をF夫人と呼ぶことにした。

この日のメインデッシュは、『仔牛のサルティンボッカ』だった。

今夜のプロダクションは、『ロスト・インタイム』で、

『振り返るといつもフレームの中で微笑む美しいあの人の写真があった。『彼女に会いたい』強い想いで念じると、いつしか僕は時空を旅していた』と解説されていたが、一人の男性ボーカルを取り巻き女たちが踊るのだった。これが会いたい女性なのだろうか

翌日、船内の図書室で夫人が言われていた、『天孫降臨の夢：藤原不比等のプロジェクト』という本を見つけた。その帯にこう記されていた。

『聖徳太子という架空の人物の誕生は、天皇制の成立と不可分である。天皇の

権威をどのように想像するかを考えて、『日本書紀』の編者がその一つの要素として作ったのが聖徳太子であった。しかし、聖徳太子だけで天皇の権威は確立しない。より根本的な作為が必要である。宗教的権威として天皇を利用するなら思い切って天皇を神としたらどうか。その途方もない企てを構想し、実現した人物がいた。『日本書紀』編集の最高責任者の藤原不比等である。そして、そのために彼によって創造されたのが高天原・天孫降臨・万世一系という神話であった』

九月二二日七時半 隠岐の島

飛鳥Ⅱは、隠岐島沖に錨泊した。

朝食後、観光船に乗り移り三島観光に出かけた。隠岐島は大小一八〇の島で形成されているが、有人島は四島だけだと言う。およそ三十分も走ると知夫里島に着いた。バスに乗り換えると山道を登っていく。その道路は一步通行だろうか、すれ違いなどできるとは思えなかった。やがて、標高三二五メートルの赤はげ山の山頂についた。そこからは西ノ島、中の島が望め、付近には馬が放牧されていた。シャッタを押してもらおう。島々をバックにしたツーショットが出来上がる。

中の島は、『承久の変』——北条政子の一喝でご家人が団結し、以後武士政権が成立した事件——に敗れた後鳥羽院に関する隠岐神社などの史跡で埋まっていた。

後鳥羽院は文武両道に優れていたが、この御在所では歌の道に力を注がれ、

『遠島百首：われこそはにいじま守りよ 隠岐の海のあらき波かぜ心してふけ』

などの歌を詠むことで、配流後一八年を過ごされ延応元年この地で崩御された。

昼食後、国賀海岸を船上から観光した。五〇〇万年前に噴火してできたといわれる赤壁と呼ばれる断崖や、アーチ形に造られた自然の門・塔は、自然の造形の巧みさを表しており、その表情は人を寄せ付けない荒々しさを持っていた。

夜、またカジノに行く。今夜はやけについている。ブラックジャックは、ルーレットより戦略的ゲームなのだが、やはり運に大きく左右する。

九月二三日八時 敦賀入港

敦賀を紹介する JTB のパンフレットに次のように書かれていた。

「戦争も差別もない。人々は親切で自由に街を歩くことが出来た。天国です」

かつて、敦賀港に上陸したユダヤ人が残した言葉です。彼らは、杉原千畝氏の発給したビザによりその命を救われた人々です。第二次大戦当時、ナチスの魔の手から逃れようとしたユダヤ人は、リトアニア日本領事館に日本通過のビザを求めて押し寄せました。領事代理の杉原千畝は悩み苦しんだ末、外務省の命に背きビザの発給を決断します。約六千人のユダヤ人を救ったこのビザは『命のビザ』と呼ばれています。このビザを持ったユダヤ人が上陸した日本で唯一の港が敦賀です。当時市民らは彼らにリンゴを無償で提供したり、銭湯を無料開放したという心温まるエピソードが残されており、敦賀港は『人道の港』と呼ばれています。

これには JTB 職員北出明氏が語る後日談があった。

当時、ウラジオストックから敦賀へのユダヤ人輸送をした天草丸に乗った JTB 職員大迫辰雄のアルバムに、七名のユダヤ人の写真があった。二〇一〇年このアルバムに接した北出氏は、このユダヤ人の消息を追った。二〇一四年、遂に一人のユダヤ人の家族が判明した。ソニア・リードだった。その写真には『私を忘れないで。素敵な日本人』とかかれてあった。この写真が遺族に送られたが、『私たちはコピーで結構ですから、これは、以前のようにアルバムに残しておいてほしい』と申し出、写真を返還に訪れたのは長女デポラだった。彼女は母の遺品を整理し『大迫辰雄』の名刺をも持参した。これらの資料は『人道の港敦賀ムゼウム』に収められている。

朝、三方五湖ツアーに出かけた。レインボー・ラインを通り山頂公園に上ると眼下に湖が見える。なぜかそこに『恋人の聖地』と云う碑があった。ツーショットを取ってもらう。

山頂から下り水月湖、菅湖の観光船に乗った。この湖は川の水が流れ込むことがなく、湖底は酸素がないため生物が生息しない、地質学上珍しいそうだ。穏やかな日よりは観光にうってつけだった。

氣比の海岸は、日本三海岸の一つで、幕末に尊王攘夷を唱えた武田耕雲斎が率いる水戸藩天狗党二三三名が斬首されたので知られているが、そのようなおぞましい話とは別に、海辺の松並木が景観を添える美しい海岸だった。

九月二四日 周終日クルーズ

今日は終日クルーズだった。部屋が左舷にあるので佐渡島が見える。地図上で

は小さな島だと思っていたがもう一時間も見えている。

午前中はビンゴゲームに参加した。昼食は日本船らしい気配りの『讃岐うどん』だった。

この飛鳥Ⅱは一二デッキで構成されているが、五デッキ以上が客船としてのスペースになっている。五、六デッキはダイニングルーム、ホール、ショッピングのエリアで七～一〇デッキを客室が占め、一デッキには船首の部分にビスタラウンジがあり、航海の様子が望め、屋上の一二デッキにはプールがある。

ビスタラウンジに続くパームコートと呼ばれるラウンジは、中央に多角形の大きな照明あり、ケンチャヤシを囲んでモンステラなどの熱帯植物が植えられている。このラウンジは、私たちの好きな場所だった。

ソファーに座ると程よい柔らかさだった。すぐに、ウエートレスにコーヒーを注文する。船の中は、アルコール以外フリーだ。窓の外をのぞくところは海面から五、六階に当たるだろうか、船が立てる波が広く拡散している様子が見られた。

私たちは、ヨーロッパ、アメリカと海外旅行も楽しんでいて、海外でも、バルト海などクルーズしている。私たちの選択基準はブルージュなど文明が残っているところが主だった。

「結構色々なところ行っているけど、まだ海外旅行をする体力があるかな」などと話していたら、「あらあら……」と、声をかけられた。声の主はF夫人だった。

夫人は着物姿だった。薄いブルーに図案化された花柄の着物にベージュの帯だった。年齢の割には少し派手で古いのではではと思われたが、今日はドレスコードがフォーマルなのを思い出した。家内の勧めで横のソファーに腰を下ろした。

家内が「一人で着られるのですか」と問うと、頷き「いつも旅行は一人ですから…」と応える。

「よく旅行なさるのですか」と訊くと、

「結構、海外もね……、そう…、この飛鳥Ⅱでも世界一周もしました…」と応える。

私たちも海外でのクルーズを何度か経験しているが、世界一周となると旅費も数百万円かかるし、それに百日はかかる毎日の生活はかなり緊張を強いられ、衣服など準備も必要だ。外国だと、フォーマルとなると男性はタキシード、女性はイブニングが多い。日本人の女性は着物が多いが…、そのような派手な場所を経験してきた人としては、控えめに見えたが、F夫人は、見かけによらず優雅な老後を送

れる方なのだと思います。

家内が感嘆の声を上げ、「すごい、どこが一番印象に残っていますか」と問いかけると、

「どこも良かったですけど…、印象深かったのはエーゲ海かしら…、ミコノス島の青い屋根に白壁…、でも一番はロードス島ですね」

見てきた光景を再現するかに目を泳がせた。運ばれてきたコーヒーを一口飲むと、

「ロードス島の名前は、ローズからきているのです。西洋人は日本人と違って、最も長く咲くバラを愛しています。かつて、この島にはバラが咲き誇っていたようです。今はブーゲンビリアですが…」と、あの可愛い笑いを浮かべた。

「私は西洋のお城が好きです。城塞と云うより要塞都市ですね。街全体(旧市街地)がすっぽりと囲まれている。これは戦いに負けると市民がすべて奴隷にされるか殺されるからですが…」と話をつづけた。

「ロードス島は有名な要塞都市です。城壁の高さは、三〇メートルあるかしら、レンガ積みの厚みのある強固な壁で街全体を囲うのです。海側唯一の門は、直径一〇メートルはあると思われる二本の円柱型の城塞に支えられています」

時々忘れていたように乾いた口をコーヒーで湿しながら話し続けた。

「騎士団通りと称される道の左右は騎士たちの宿舎で、ここの石畳の道を通り抜けると騎士団長の館に至ります。ここも同じように重厚な門…、うまく描写が出来ませんが…」

私は、うまく表現できなくて当たり前と思った。実際に見ているとおりに表現できないもどかしさを感じるのだろうと思った。興に乗った彼女は話し続けた。

「聖ヨハネ騎士団はご存知ですか…」と云うと、

「私の父はクリスチャンだったのです。私は洗礼を受けていませんが、キリスト教に興味があります。そのためこの騎士団に興味があったのです」と、騎士団の話始めた。彼女の説明は要約すると次のようだった。

ヨハネ騎士団は、十字軍時代聖地エルサレムにアマルフィの商人が巡礼者の介護施設として設立された。しかし、十字軍のエルサレムでの領土支配が失われるとイスラム教徒に追われ、キプロス島などを転々としたが、一四世紀ロードス島に移動しキリスト教戦闘集団の前衛となった。テンプル騎士団が消滅した後、唯一となったこの騎士団は、ヨーロッパのキリスト教国家から多額の寄進を受け財政も

豊かで、騎士はすべて貴族の子弟だった。

騎士たちは国別に編成され、最多のフランスはじめ八つのグループに編成されていた。

ロードス島はトルコに近く、トルコ船がエーゲ海に出るためにはこの付近を航海する必要があった。このトルコ船を異教徒の名目の元に襲う高速ガレー船での海賊行為は、騎士団の得意とするところだった。海軍が貧弱なトルコにとって目の上のたん瘤だった。

この騎士団は、幾度かの戦いを経験するが、第一は一五世紀半ばエジプトの艦隊に包囲されるが守り抜き、その後オスマントルコのメフメト二世の攻撃を受けるが、五か月の籠城戦の末撃退するが、十六世紀に至りオスマントルコのスレイマン一世が、四〇〇隻の船団と二〇万の兵で攻撃に及び六か月の攻防戦の末、人民の生命を保証するのを条件に騎士団は名誉の撤退し、マルタ島のバレッタに移動した。以後ナポレオンに滅ぼされるまで続いた。

時には、年代まで入る彼女の話に情熱さえ感じた。と、同時にこれだけの知識は単に趣味で得られるものではないと思った。職業的には、学芸員、教師、本の編集者などを想像し問いかけたが、笑って応えなかった。このような知識を持つての世界一周旅行は、別な世界が開け素晴らしいものだったに違いないとうらやましかった。

今夜は、フォーマルだ。タキシードの男性、イブニングの女性はなく、男性はダークスーツ、女性は地味なジャケット姿で、海外のようにどんな服装するかと楽しみにするような人はいなかった。この中では女性の着物姿が目立った。

夕食後キャプテンズ・パーティーがギャラクシ・ラウンジで行われた。船長の挨拶に続き、シャンパンで乾杯し、飛鳥Ⅱプロダクションによる『オペラ ハイライト』と称するショーが、『フィガロの結婚序曲』で始まった。

ショーの前に、船長と一緒に写真を撮るサービスがあった。私たちも撮ってもらった。

家内が「おじいちゃんも、氷川丸時代こんな撮影のサービスに応じていたのね」と、笑っていた。

九月二五日八時 函館入港

函館は、最も早く外国船に門戸を開き、現在でも異国情緒町並みで、『ミシュラ

ン・ガイド・ジャパン』において『函館山からの展望』が三ツ星とされている。

私たちは函館を何回も訪れており五稜郭、旧道庁などを知っていたのでトラピスト修道院、函館山、赤レンガ倉庫の観光バスに乗った。偶然 F 夫人も一緒だった。夫人は、キリスト教に興味があると述べていたので、このツアーへの参加は当然だったのだろう。

海に沿った道を小一時間走ると、杉並木の続くまっすぐの道の奥に、レンガ造りの瀟洒な建物が見えてくる。

一八七三年、キリストの禁令が解かれると、各国の宣教師が訪れ教会を建設した。

トラピスト修道院は、日本で初めての男子の修道院で——女子の修道院はトラピスト修道院——、女子禁制で現在も女子の見学は許されていない。

今日は、内部見学日ではないため外からの見学だった。広い敷地の一角にある付属のサービスステーションでお土産を買った。まだ豊富に物がなかった五〇年時代の始め、トラピストのクッキーは珍しいものだった。今となれば珍しいものではないが、懐かしさで買った。

門前の庭園はよく手入れされていて、芝生がきれいな緑の絨毯を作っていた。

ベンチに腰掛け F 夫人に問いかけた。

私は、キリスト教と云うと、遠藤周作の『沈黙』を思い出す。物語は、十六世紀キリスト教禁制の時代に、布教のため来日した宣教師が逮捕され、信者の住民が棄教を迫られ、拷問を受けて苦しんでいる人々の声を聴かされ、役人の『お前が転べば人々を許す』との言葉に、神に是非を問いかける神父に神は無言だった。

「この転んだ神父をどう思いますか…」と問うと、「重い問題です…」と応え、「信者である以前に人間ですものね…」と云うと、黙ってしまった。

私は、歴史と云い、このような問題に対しても、的確に応えてくれる彼女と付き合えたのはとても楽しかった。

函館山の三ツ星の景観、この街は半島のように伸びた先端に函館山があることに由来する。海拔三三四メートルの函館山からは、大きな曲線を描いて両側から市街地に食い込む海が、街の建物との対比で鮮やかだ。横浜も神戸を港町だがこのように一望に展望できる高い場所はない。

街をバックに三人で写真を撮ってもらおう。赤レンガ倉庫を見て帰船する。

九月二六日八時 大船渡入港

大船渡は、秋刀魚の水揚げ量が多く、秋刀魚は大衆魚として知られているが、このように大衆魚となったのは江戸時代の後期のようなのだ。

大船渡は津波により甚大な被害を受け、『奇跡の一本松』で知られているが、中尊寺や遠野物語、狛鼻溪などの観光が組まれていた。私たちは狛鼻溪を選んだ。

砂鉄川が石灰岩を侵食して出来たと言われている二キロに及ぶこの溪谷の兩岸は、おおよそ百メートルの断崖絶壁に囲まれている。この川の船旅は、二人の船頭が竿で巧みに操るものだった。舟遊びで船頭が竿で操るところは少ないそうだ。

『狛』とは獅子を意味するらしいが、侵食された鍾乳石が獅子の鼻に似ていることから付けられたという。しばらく川を下り上陸すると、大狛鼻岩一二三メートルとの表示に出会った。

この秘境が、名所指定を受けたのは大正時代と新しいが、それは秘境として知られ役人が来ると、住民はいらぬ労力を強いられるため、風土記などにも隠していたためだそうだ。

一六時帰船。夜、水中花火があった。小さなボートが花火と思われるものを落としていくと、数秒後に扇を広げたようなに直線的な火花が上がる。あまり花火の形に変化はないが船上からの眺めを楽しんだ

九月二七日一〇時 大船渡出港

どこの寄港地でもクルーズ船が大歓迎を受けるのは、一度に数百人に及ぶ観光客のため寄港地には経済効果があるようだ。

平日の朝だというのに大勢の見送りを受けた。

二メートルはあると思われる権現様と呼ばれる大きな獅子頭が、シャベルカーにかぶされ、シャベルを操ることで器用な舞いを見せる。大漁旗が振られ、埠頭に昭和保育園ののぼりを立てた十二人の子供たちが、ピンクの布をたらし法被姿で太鼓をたたく。何度かの練習の上であろうかわいひ撥さばきに、プロムナードデッキの船客は拍手で応えていた。やがて、二〇人の若者が郷土民謡に合わせて踊り始め、テープが一斉に投げられ埠頭と繋がると、ドラが出港の合図を告げた。尾を引くようにならされるドラはドラマチックだ。船がダグボートに曳かれゆっくりと岸

壁を離れ始めると、プロムナードデッキに乗務員の女性たちが法被姿で現れ、乗客が彼女たちを先頭に肩につかまり長い列となりデッキを練り歩き始め、出港のセレモニーは最高潮になった。船客から「有難う……」との、大合唱が起きテープが海面に漂い始めるほど離れると、三声の汽笛が別れを告げた。

昼過ぎ金華山沖を通過するとのアナウンスがあった。

牡鹿半島の先端に位置するこの島は、弁財天信仰で聖武天皇時代から知られ『三年続けてお参りすると一生お金に困らない』とされている。

F 夫人の提案で夕食を一緒にすることにした。私たちが夫人に気に入られたようだ。

食事はサンマとホタテのマリネで始まった。

私たちが、結構旅行しているが、船での世界一周はまだで、一周にまつわる話などをもう少し聞きたいと、直接聞くのも失礼だと思い、旅行を話題しようとベニスの印象を

「サンマルコ広場に立つと、さすがに嘗て覇権を唱えた国だと思いました」と、話題を向けるとそれには応えず、東北の災害の話始めた。

彼女は盛岡で地震にあったわけだが、ひどい揺れを受けたものの、直接の被害を受けることはなかった。

「心配だったのは原発の被害です」と話しながら、ぐい飲みを口に当てると

「甥は、『再生エネルギーだと云うが、ほんとに大丈夫なのか。ソーラー発電は、半分は夜、残りの昼間も日照率は半分ぐらいではないか』と、云うのですよ。電力は人間で云えば血液ですから心配ですね」

私は、原発反対が多い中で、彼女のような疑問を持つ女性は珍しいと感じ、どんな職業の人だろうかと改めて興味を覚えた。

その後、甥が就職して横浜に住んだので一緒に生活しているのだと語った。

夕食のメインデッシュは『黒毛和牛リブロース肉の網焼き』だった。

食後ロビーで記念写真を撮った。

九月二八日九時 横浜入港

下船は各階別に整然と行われ、埠頭に運ばれている荷物を受け取る。

F 夫人は甥が迎えに来るとのことで、再会を約して別れた。

我が家は、タクシーで一五分程度なのでクルーズによる旅行が一番楽だ。  
一時には家に帰りついた。

## 甥からの手紙

写真お送りいただきありがとうございました。叔母は、よい友達に会え楽しい旅行になったと大変喜んでおります。

叔母は、細かい字の手紙を書くのが容易でないため、私が返事をしたためております。

私は、お聞きと思いますが小学校4年の時父を失い、翌々年母を失い、以後母の五歳上の姉、叔母に育てられました。叔母は、一人でしたので私を実の子供の様に育ててくれました。当時、まだ四〇代でしたが、私のために結婚もせずに勤を続けてくれたのです。

叔母は高校の社会科、世界史の教師でしたので、常々自分の目で自分の語っている歴史の世界を見てみたいと、世界一周を望んでおりました。

しかし、私の大学までの養育のために、叔母は旅行と呼べるほどの旅行もできませんでした。この叔母に報いるため、私は初ボーナスで、世界一周とはいきませんが、せめて日本一周をと思いプレゼントしたのです。

いつの日か、世界一周の叔母の夢をかなえてやりたいと思っております。

.....

ある夜、私は夢を見た。世界一周の飛鳥Ⅱに乗り手を振る着物姿のF夫人を…。  
(了)

(2018-9-19)

## (参考文献)

- \*『天孫降臨の夢』 大山誠一
- \*『ロードス島攻防記』 塩野七生
- \*『“命のビザ”を繋いだもう一つの物語』 JTB